



からこかぎ

第 2 号
平成 2 4 年
9 月 1 日

楼閣を背景にコスモス畑

大森 初美

田原本町では、昨年にひきつづき唐古・鍵遺跡地内で、景観美化のため、コスモス畑を計画し、その植栽ボランティアを町広報六月号で募集しました。我々唐古・鍵遺跡の保存と活用を支援する会も、遺跡保存活動の一環と位置づけ植栽をお手伝いすることになりました。

第1回目、コスモスの種蒔きを7月28日(土) 早朝6時30分現地集合として、男女19名と町内応募者1名の計20名で、蝉しぐれと夏の虫の音を聞きながら、「二つまみで1mの筋蒔き」を合言葉に作業を開始しました。

植物の種蒔き等生まれて初めての人もおり、配られた種子が足りないともらい歩く人も続出!それでも予定より早く7時過ぎには、すべて無事終了、記念写真を撮り、次回を確認して解散しました。

早朝にもかかわらず、郡山や檜原

など遠方より来てくださった方々、本当にお疲れ様でした。次回もよろしく願っています。

なお、雑草取りは、8月18日、9月15日、10月20日午前6時30分〜7時30分と予定し、遺跡駐車場集合になっております。

(追伸)

8月18日土曜日6時半より、コスモス畑の雑草取りをしました。連日の猛暑ですが、コスモスは芽を出していました。秋の開花が楽しみです。



古代ものづくり

—石包丁の石材—

山本 淳史

まず、活動報告です。6月13日・月ヶ瀬村奈良晒し見学・6月27日・総合学習火おこし道具ほか修理・7月11日・藍染め・7月25日・糸紡ぎ・勾玉作り研修・藍叩き染め等を行いました。

毎回12人前後の参加者ですが、この活動の中で奈良晒し伝承館で糸紡ぎの技を取得したこと(写真)と、また奈文研の深澤先生からいただいた種から藍の生葉染めが出来たことをご報告します。

次に、今後の予定ですが、8月末に土器づくり、9月は吉野川の緑泥片岩の採取、石包丁製作、そして10月は穂刈り体験へと進みます。

今回の石器作りの手本とするのが、ミュージアム第二室に展示されている石包丁とその未成品です。これを見ると層状に剥離する石材を巧みに利用している事が分かります。なかでも出土量が多いのは緑泥片岩の石包丁です。

この特異な層状剥離の性質は、岩石が高い圧力と熱を受けて変成し、結晶が一方に配列して生まれます。その端的な例が雲母です。このような岩石を総称して結晶片岩と呼称しますが、変成岩の一種です。この変成岩は700

0万年前に日本列島が形成された時のプレートとの衝突で生成されました。その衝突の痕跡が中央構造線(九州〜四国〜和歌山〜渥美半島〜関東から太平洋に抜ける)です。結晶片岩の一種である緑泥片岩もこの線上に広く分布し、近畿では吉野川で採取できます。もともと海底に堆積した泥岩が変成したもので緑色をしています。

また、耳成山の流紋岩も同じように層状に剥離しますが、こちらは火成岩です。そのためガラス質で硬く加工が難しいので、石包丁利用は弥生前期で終わり、加工に適した緑泥片岩に移行しました。実際に製作するとその差は歴然としています。流紋岩はサヌカイトでは紐通し穴の穿孔が難しく、打撃を必要とし破損の確率が高まりました。今回の古代ものづくりでもこの違いを体験できればと考えています。



勾玉について

—総合学習支援活動—

今西 和代
川端 優秀

(1) 勾玉づくり

一学期は、北小(4月18日6年生48名)と東小(7月4日6年生22名)ともに『ミュージアム見学』の後に工作室などに移動して『勾玉づくり』を行いました。勾玉についての説明の後、製作開始。角を削ったものの平面はどこから見ても曲面にしなければならぬのが児童には難しい所です。また、付属の立方体を球の形にする事も至難の技でした。

1時間程で勾玉の形を作り、最後の仕上げに細かいサンドペーパーで磨くと艶が出てきて子供たちは感動の声を挙げていました。穴に糸を通して出来上がりしました。写真は、子供の作品の一例です。

(2) 勾玉のおこり

勾玉は、C字形にちかく湾曲し、丸く膨らむ一端に紐を通す孔をうがつた玉です。孔のある方を頭、他方を尾、湾曲部の内側を腹、外側を背と呼んでいます。古事記や日本書紀では、曲玉または勾玉、あるいは勾璫と書かれて

います。

勾玉は、縄文時代以前(13000年前)よりみられていて、動物の牙(熊の牙)に穿孔した垂飾がその祖型ともいわれています。西アジアや中国にも石製の勾玉形垂飾があり、朝鮮半島では無文土器期(縄文後期)弥生期)にはアマゾナイト製がありますが、日本で独自に発達したものとされています。

(3) 勾玉のいのり

ところで、勾玉は、祭祀具か装身具かその評価は分かれています。私は、その原材料の変化と当時の社会の仕組みを関連付けて理解しています。

縄文期(旧石器勾玉と呼ばれる)には土製や身近な川原石や動物の歯牙など身近な材料でつくったものが多く、弥生期には貝類や碧玉、水晶、琥珀、翡翠、ガラス製など色の美しい遠方の素材もあらわれ、遺物数も多く更に威信材としての側面も強くなります。また正倉院にも硬玉・碧玉・メノウ製勾玉があり、これらは古墳時代の伝世品と言われています。そして東大寺法華堂の不空羅素観音菩薩立像の宝冠や金銅幡などにも勾玉を飾ってあります。

勾玉は、当初には縄文精神性に裏付けられた祭祀性(呪術性)が顕著に見られ、生産経済の移行に伴い階層性が顕在化

するとより装飾性が強調されてきます。しかし、その基底には、縄文期の精神性を持続していたことは奈良期の諸仏像に見て取れます。

昨年東北大震災から一年を過ぎました。勾玉づくりに子供たちが熱心に取り組んでいる姿を見てみると、古代の人たちの勾玉に託す祈りをふと思いました。

さて、10月からは、総合学習の土器づくりや野焼き・赤米炊飯の活動が待っています。次は、土器作りのご報告をいたします。

(追伸)

先口、東小学校と田原本小学校6年生よりミュージアム見学と勾玉づくりのお礼の文集が届きました。とてもきれいな勾玉ができてうれしかったと書いてあり、私達もうれしくなりました。

弥生勉強会に参加して

植田 洋高

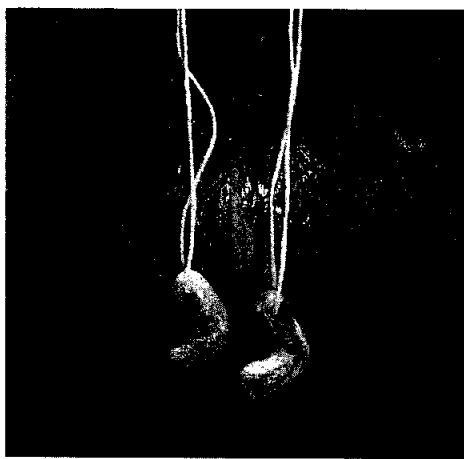
平成24年6月3日(日)に藤田三郎先生のご参加をいただき、盆地南部の拠点集落である鴨都波遺跡と京奈和道路建設により新たに発掘された中西・秋津・今出・京奈和自動車道関連遺跡などを訪ねました。

秋津州の道と呼ばれる葛城山麓の今回のコースは、田植えの季節でもあり、道沿いの小川の流れも清らかに感じられました。

鴨都波遺跡では、済生会病院建設により発掘された弥生時代から古墳時代にかけての墓域や集落の変遷が確認できました。ここでは、藤田先生より唐古・鍵遺跡等の盆地内の拠点集落とは集落構造が異なっており、特に地形に留意して評価する必要があるとの指摘がありました。

また、京奈和自動車道御所インターチェンジ建設にともなう一連の発掘調査で検出された弥生時代前期以来の水田と里山の現状が確認できました。ここでは、藤田先生より、弥生水田址の発見の見通し及び農業生産力の評価に関わるお話までうかがえました。

今回の弥生勉強会では、調査により遺物や報告書は残されますが、開発に



より無くなってしまう遺跡の現状も見る事ができました。古代はロマンばかりではなく、文化財保護の重要性も感じられる見学になりました。

藤田先生、炎天下、丁寧な説明をいただきありがとうございます。

第4回は、10月14日(日)に、坪井・大福遺跡と芝遺跡等を探訪とのこと。次回も、勉強会に参加し、弥生時代について学び、意見を交わしていきたいと思えます。

追記

今回の葛城山麓地域は、葛城山系より湧き出る豊富な地下水を利用して、多くの酒蔵があります。全国的に人気の清酒梅の宿(梅の宿酒造)、7年連続金賞受賞(千代酒造)の千代の寒梅、清酒百楽門(葛城酒造)、清酒金鼓(大倉本家)、鴨都波神社近くに清酒風の森(油長酒造)があります。



今回の桜井地区にも、大神神社近くに清酒三諸杉(今西酒造)、清酒談山(西内酒造)があり、いろいろな種類のお酒が発売されています。興味ある方は一度味わわれてはいかがでしょう。お酒に関する問い合わせなどありましたら私(植田)までお尋ねください。

第4回弥生勉強会

井上 知章

1 はじめに

昨年10月より始まった奈良県の拠点集落遺跡・探訪の旅も、第4回を迎えることになりました。主だった遺跡名を挙げると、第1回(平等坊・岩室遺跡・前栽遺跡・長寺遺跡)、第2回(多遺跡・保津・宮古遺跡・羽子田遺跡・矢部東遺跡)、第3回(鴨都波遺跡・中西遺跡・秋津遺跡・今出遺跡・京奈和自動車道関連遺跡)等を訪れました。

それぞれについては、後日、会報において再整理することとし、今回予定の坪井・大福遺跡、大福遺跡、芝遺跡について簡単に紹介いたします。なお、添付しております「第4回弥生勉強会のご案内」のチラシもご参照ください。

今回訪問するのは、奈良盆地南側に

位置する桜井市ですが、弥生前期から後期まで継続する「拠点集落」は、坪井・大福遺跡(坪井地区は、橿原市に位置。)及び芝遺跡が相当します。

2 坪井・大福遺跡

調査地点であった耳成高校校庭の大溝が遺跡の北ないし北西に位置することにより、行政区の異なっていた坪井遺跡と大福遺跡を一つの遺跡とし、昭和59年に呼称変更がなされました。(昭和56年には、それまでの大福西遺跡を大福遺跡と呼称変更。)

遺跡は、盆地南東部の微高地上にあり、耳成山の北東2kmに位置します。東西1・1km、南北600mの範囲に及ぶ弥生中期を中心とした前期・後期及び古墳前期にいたる複合遺跡です。

遺跡北側に現寺川と同方向の落ち込み遺構(河川跡)があり、その東西に微高地が分岐し、更に遺跡南西側に旧河川が微高地を形成しており、それらを圍繞するように多重の環濠が形成されています。また、生産域は、北側の還元橋を超えた橿原市リサイクル館北東敷地及び西側微高地周辺に検出されています。弥生勉強会では、前期段階から継続する墓域及び地形、生産域をみて坪井・大福遺跡の推移を確認します。

3 大福遺跡

耳成山東方1・3km、三輪山北東3km、横大路中ツ道の交差点北東に位置し、寺川と米川の複合扇状地にある東西600m南北450mの範囲の遺跡です。現在まで、29次の調査が実施されています。寺川流域には、吉備遺跡、坪井遺跡、唐古・鍵遺跡、東新堂遺跡他があります。

大福遺跡は、坪井・大福遺跡の墓域として評価されていますが、坪井・大福遺跡が後期になると遺物量が減少するのに対し、後期にはその遺物量が増加しています。その視点から、遺跡の過去数年の調査内容特に25次から29次の調査内容を確認します。市道建設に伴い遺跡中央部を南北に縦断したそれらの調査では、まだ中期段階は、方形周溝墓が継続して検出されていますが、中々後期にいたると調査地点北端では、L字型溝、大溝や溝(V字溝やVI-3様式土器の多量投棄された溝)の他多量の木製品、土器、大量の炭化米、青銅器製造関連遺物が出土しています。これらの遺構・遺物を確認し、大福遺跡の集落の変遷をみます。

4 芝遺跡

遺跡東2・7km、三輪山の麓の扇状地に位置し、東西800m南北600

m(900×700)の範囲の弥生期から古墳時代に至る複合遺跡です。

平成18年の第33次まで調査が継続されています。遺跡北側には纏向川が西流し、遺跡南西では初瀬川が北西流しています。集落内部では自然河道が網目状に流れ、それにより形成された微高地上に集落が形成されています。特に中期では、集落範囲が北の方向に拡大しますが、後期になると纏向遺跡に近接する北側の集落遺構が希薄となり、東域及び南域の方向に居住域が移動します。そして、この後期遺構を覆う粗砂層(VI-3様式期)まで遺跡は継続します。

5 最後に

今回の弥生勉強会の訪問地点は、古墳開始期の指標ともなっている箸墓古墳に最も近接した地域です。

初期ヤマト政権の発生過程に、それ以前の奈良盆地の弥生社会にその痕跡が認められないといわれています。そのため、初期国家形成の解明には、纏向地域の古墳期の考古資料を中心になされています。

しかし、弥生期の社会・文化の解明を目的とする以上、奈良盆地の動向を踏まえて、当時の社会の変化を確認したいものです。そういう意味合いで、第4回の弥生勉強会は、中期〜後期の集落の変遷に着目します。

また、最近、桜井市教育委員会の発掘により磐余地域の丘陵部で、高地性集落と想定されるV字断面の溝3条が検出されています。安部山遺跡に位置し、桜井公園遺跡群と報告書では表示されています。今回の訪問先ではありませんが、併せて事前勉強会でご報告いたします。

なお、奈良盆地では、第1回弥生勉強会でふれた東大寺山遺跡(環濠集落)等の高地性集落があり、後期段階の盆地内の緊張関係が指摘されています。

会 員 募 集

趣旨にご賛同いただく方の会員募集を行っております。お知合いの方もお誘いの上活動にご参加ください。

年会費 2,000円

事務局からのお知らせ

今年度11月末日までの当面の活動予定は、次表のとおりです。日程等変更の場合は、掲示板等によりご連絡いたします。

活 動	日 程
遺跡保存活動(コスモス畑)	9月15日・10月20日
ものづくり教室	9月12日 石材採取(古野川流域)、25日 打製石器づくり
	10月10日 磨製石器づくり、24日 石包丁による穂摘み
	11月14日 ペン画・石器作り
	11月27日 ペン画・脱穀・破魔矢づくり
小学校総合学習支援	田原本町内小学校4校 土器づくり・脱穀・炊飯活動・野焼き
弥生勉強会	10月6日 事前勉強会、10月14日 現地勉強会
親睦活動(ペン画教室)	ものづくり教室と合同実施
田原本町文化祭活動	11月3日

編集後記

唐古・鍵遺跡の保存と活用を支援する会」の会報「からこかぎ」をお送りいたします。なお、会報の充実を図るため編集委員を1名増員いたしました。編集委員は、次のメンバーとなっております。また、第2号は、全て手作りで作成した創刊号と異なり、印刷等は東洋印刷(株)さんをお願いしています。前回より見やすくなっていると感じていただけたら幸いです。

編集委員

井上知章 植田洋高 大森初美
小林恒雄 福島道昭 谷口敬子

唐古・鍵遺跡の保存と活用を支援する会

〒636-0247

奈良県磯城郡田原本町阪手 233-1

田原本青垣生涯学習センター

唐古・鍵考古学ミュージアム内

TEL:090-9257-3688

Email:karakokagijimukyoku@swan.ocn.ne.jp